

Title	支那戰國時代を顧みて
Sub Title	
Author	橋本, 増吉(Hashimoto, Masukichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1944
Jtitle	史学 Vol.22, No.2/3 (1944. 7) ,p.1(95)- 16(110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19440700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

支那戰國時代を顧みて

橋本 増吉

一

分立より統一への進行は、世界歴史の大勢である。正に歴史的必然の顯現である。もとより、その間に統一破れて、分立の時代を生ずることも見るのであるが、そはつぎの更により大なる統一への準備時代たる意義を有するに過ぎないのである。

而して、「戦ひ」は分立に始まつて、統一に終るのである。そこに、前時代よりも一層擴大せられた、大統一的平和時代を創造し、人類の文化は向上の一途を辿るのである。その最終の目標が、眞に全世界的大統一による、世界平和の顯現にあることは、正に疑ふべからざる歴史的必然である。

二

阿弗利加の北岸ナイル河の流域が、人類文化向上の先驅をなせることは、種々の點より見て、疑ひ

フガン地方を抱有した、空前絶後の大統一的帝國の現出を見たのであつた。その後、印度民族の數量的大増大發展は、もとより認められ得るのであるけれども、印度人による國家としては、遂にこれ以上の大帝國を形成すること能はずして、今日に至つてゐる。而も、帝國の國威絶頂に達し、その境域も亦最大の域に達した阿輸迦王の即位が、支那に於ては、恰も秦の昭襄王三十五年で、またその王の治下に佛典三藏の結集が行はれたのは、秦王政（後の始皇帝）の即位三年と傳へられ、秦の大統一前二十四年で、正に戦國末に當つてゐる。

而して、支那に於ける戦國時代は、恰も印度に於て婆羅門哲學の諸學派が並出した、摩揭陀國大統一以前の列國分立時代に類し、あらゆる支那思想の大凡出盡せし時で、軀て秦・漢による大統一的帝國現出の先驅をなせる、列國分立の時代である。蓋し、黄河及びその支流域に占據した諸部落は、一度周によつて統一せられ、こゝに支那文化の性格確立して儒家の發生を見たのであるが、更に黄河・揚子江の兩流域を抱括し、北は遼河、南は珠江の流域に亘りて、これを奄有せし、より大なる大帝國の完成を見んがための列國對立抗爭時代で、その間北方にては、匈奴の大統一完成し、西方にては、北にスキタイの大統一的活動があり、黒海の北方ウクライナ地方を根據として、その國力は東方遠くアルタイ山邊に及びしものゝ如く、南にアッシリア・波斯の後を受けた、アレキサンデルの大統一的活躍、その刺戟によりて起つた、摩利那王朝の印度に於ける大統一的帝國完成の時に當つてゐる。

而も、亞歐に亘り、その大統一的運動を展開し、政治的にこれを實現せしものは、初め小規模ながらアレキサンデルがあり、ついでアラビアの活躍があり、後に蒙古民族の大遠征による蒙古大帝國の成立が存するのである。何れも眞の世界的大統一への先緒として、認めらるべきものであらう。

四

かくの如き政治的大統一は、また多くは思想的大統一運動を伴ふものであり、支那の大統一は大統一的思想を標榜せる、儒教の國教的地位を確立し、印度の大統一は同じくその大統一的思想を抱懷せる、佛教の國教的位置を確定し、波斯の大統一は拜火教の國教的性格を確立し、更に東方に於て、佛教が世界的宗教の性格を取得して、全亞細亞民族の精神的大統一運動を展開せるに對し、西方に於ては、基督教が羅馬の大統一や、獨逸民族の大統一に、その大統一的中心思想たる地置を確立し、歐羅巴民族の世界的大發展に伴ひて、世界的宗教の性格顯著なるに至り、亞刺比亞民族の大統一運動も、即ちイスラム教の世界的發展と緊密不離の關係に於て行はれしこと、正に周知の事實である。

而して、かくの如く政治的また精神的にその漸次擴大せらるゝ大統一的傾向は、もとより精神的また經濟的の諸種の原因に基くものではあらうが、また特に交通機關の發達に即應するものと、認められるのである。實に埃及に於てそのナイル・ニウフラテス兩河に亘る大統一的帝國の創建は、馬の使

用と對應し、同様の事情はアッシリア帝國の成立にも、亦重用なる原因となつてゐる。支那に於て、戰車時代であつた春秋時代から、騎馬の利用と共に戰國時代となり、遂に秦・漢の大統一が完成せられたのであり、特に匈奴・突厥・蒙古の大統一や、スキタイ・アラビアの大活躍の如き、騎馬の利用なくしては、到底その實現を見ることは、出來得なかつたことと考へる。同様に、歐羅巴民族近世の大發展に、最も強力なる援助を與へしものは、騎馬帆船の時代より、蒸氣電氣の時代に移行せしことで、特に最近石油ガソリンの利用著しく發達して、空陸海の交通通信が正に劃期的發達を遂げつゝあることは、將來の人類生活が世界を打つて一丸とする、眞に文字通り、世界的大統一を結果せざればやまざるべき、趨勢を示してゐる。

五

そこで、支那の戰國時代であるが、今日からこれを顧みると、恰も現在全世界を舞臺とせる列國の對立抗爭をば、約二千數百年以前の古へに、支那中原の地に於て豫め實演せし、正にその縮圖として、認めらるべきものと考へる。そこに、吾等は多くの示唆を得せざるを得ないのである。

實に、皇紀二五八年より四四〇年に及んだ、所謂戰國時代百八十三年間は、大小幾百の戰鬪が交へられた、文字通りの戰爭時代で、「戰ひ」を見なかつた年は、殆んどなかつた位な混亂時代であるが、

而も、今日よりこれを顧れば、その大體の傾向は、明かに周の統一に比して、更に遙により大なる大統一を完成せんとする準備時代で、年と共に漸次大統一の方向へ進んでゐるのである。而して、その大統一の中心的勢力たりしものは、その時代の最初から最後まで、常に秦國であつたことが認められる。すなはち、その初期に於ける合從といひ連衡と稱するものは、凡べて強秦に對する對策として企圖せられたもので、春秋時代にはなほ晉・楚の下風にあつた秦が、戰國の初めよりは常にその主動的立場を保持してゐる。特に戰國中期以後は、その傾向益顯著となり、他の列國は常に秦の外交策に踊らされ、その末期に於ては、殆ど全く秦の意のまゝに操縦され、遂にその併合するところとなつたのである。

されば、所謂戰國時代なるものは、「言にしてこれを表現すれば、秦の大統一的活躍時代とも稱しえるのである。春秋時代には晉・楚の下風にあつた秦が、何故に戰國時代となりてかくも主動的中心勢力たる立場を、確保し得たのであらうか。更に考究すべき要あるを思ふのである。

六

戰國初期に於ける秦國勃興の原因として、まづ考へられることは、秦が列國に先じて内政の改革を斷行し、中央集權的政治體制を整備確立したことである。蓋し、春秋の末期に於ては、秦も亦他の列

國と同じく、權臣が下にありて、政治の實權を握り、數代の君主は皆その擁立するところで、たゞ手を拱いて、その制御に委する實狀を呈したのであるが、戰國の初め、皇紀二七六年（周安王十七年）獻公位に即くに及び、公はその自己を擁立せし權臣を除いて、政治の實權を恢復し、ついで、二九九年その子孝公嗣ぐに及び、大いに人材を四方に求めて、國政の改革に努め、中にも衛鞅を重用して、内政の大改革を斷行し、法を變じ、刑を修め、都を咸陽に遷して、全國を四十一縣に分ち、縣に令丞を置いて、これを治めしめ、所謂郡縣制度の基を開き、以て中央集權的政治體制を確立し、君主の權力を増強したので、當時の他の諸國に比して全くその面目を一新し、隨つて、天下の人材も大にその材能を發揮する機會を得たことゝ推せられるので、秦の國威大に揚り、將に列國を壓倒せんとする勢を示したのであつた。

つぎには、地の利を得たことである。もとより、その地勢が攻むるに難く守るに易きものがあつたことも、認められるのではあるが、それは春秋時代も同様であつたはずである。特に戰國時代に於て、その國力の發展に與つて力ありし所以のものは、その地理上の位置が西方に位し、西方文化東傳の要衝に當つてゐたといふ、事實であらうと考へる。實に周が同じくこの地に起りて、遂に黃河流域地方の統一を完うせし所以も、亦この地理上の位置を無視すべきではあるまいと考へる。

七

實に亞・歐・阿の三大陸を背景とする秦の地理上の位置は、決して他の諸國の敢て企及すること能はずる、天與の恩恵であつたため、支那に於ては、最も早く西方文化の刺戟影響を受くべき立場にあり、かの列國に先んじて、國內體制の大改革を斷行せし所以のものも、或はかくの如き地理上の事情に原因するにあらざるかをすら、思はしむるのである。

蓋し、西方の事情を顧みるに、皇紀二九九年より三二三年に亘る孝公二十四年間の治世は、恰もマケドニア勃興の時期に當り、その王フィリップ二世の即位は孝公の三年で、始めて變法の令を施行した時である。そのころに至るまでには、二一二年サラミスの海戦に於て、波斯の大軍を破つてより、八十數年に亘り、希臘人の活躍時代が繼續したのであり、同時に、秦の發展が北方に於けるスキタイや、南方に於ける波斯とも、何等の關係なしとも斷せられないことは、恰もこの地に於ける周の建國が、西方に於けるアッシリアの建國と、東西相應する事實と共に、多少の考慮を要すべく、必ずしも無稽の空想として、これを排棄すべきではあるまいと考へる。かの戰國初期の作かと思はれる禹貢の内容が、特に西方河西の方面と、西南方四川の方面とに、その知識の範圍が擴大せられ居る如き、また西方との關係を思はしむるものではあるまいか。

而して、マケドニア王アレキサンデルの波斯遠征は、三二七年即ち秦の孝公の後を承けた、惠文王四年に始り、その中央亞細亞に進軍して、シル河畔に達したのは、三三三年で、翌年更に南に下つて印度に侵入し、三三五年五河地方を平定し、翌年歸路につき、三三七年スサに凱旋し、翌三三八年バビロンに歿したのであり、支那に於ては、この年韓・燕各王號を探り、こゝに七雄國凡べてが周室を無視して、自ら王と稱するに至つた譯で、當時は正に戰國の初期蘇秦・張儀の活躍時代であり、蘇秦の合從策成り、六國の相となつたと傳へられるのは、三二八年アレキサンデルが波斯王ダリユス三世の軍を敗り、こゝに波斯王國の滅亡を見たのと、同一年であつた。

八

翻つて、現今の世界情勢を一顧すれば、要するに交通機關の著しき進歩發達の結果として發生せし、支那戰國時代の擴大強化に過ぎないもので、或はその複寫とも稱すべき、顯著なる類似を有するものの如き感なきを得ないのである。

蓋し、現今の大勢は支那戰國時代の當時と同じく、大統一的傾向が頗る顯著で、天意は正に人力の如何ともなす能はざる、目標に向つて突進しつゝあり、この大勢に乗することは、即ち天の時を得るものと稱すべく、この大勢に抗することは、即ち天の時に背くものである。事に處するの士は、

まづその順逆の理に徹すべきで、こゝに歴史的必然性の動かすべからざるものあること。吾等の特に注目しなければならない、緊要なる重點である。たゞ、現下の問題は、その大統一の中核たり、指導國たるべきものが、果して何れの國なるかといふことである。

而して、予は何の躊躇もなく、その中核たり指導者たるべき國は、我が日本皇國なるべきことを、斷言するに憚らない。試みに世界の地圖を案するに、その地理上の位置に於て我が國程有利なる恵まれたる位置に占據するものは、他に全くその類例を見ないのである。もとより、その國土は島國として、狹長なる列島に過ぎないのであるが、而も、その位置は東に世界最大の太洋を擁し、西に世界最大の大大陸を控へ、北に世界第一の漁場を有し、南に世界第一の原料生産地を押へてゐる。世界何れの國がこれ程にも有利なる位置を占むるものがあるか。多言を費やすの要なき明白なる事實である。もしそれ、その地理的位置が守るに易くして、攻むるに難き諸條件を具有する事實は、特に證明の要なき自明のことである。

而も、一度朝鮮との間に海底墜道にして完成せんか、(その實現は今日もはや時の問題たるに過ぎないが)、我が國は遂に單なる島國ではなく、大陸の一部をなして、同時に島國たる、古今を通じて未だ曾て存在しなかつた、特殊の性格を有する國家として、その偉貌を現はすに至るのである。果してかくの如き國家が古今を通じ世界の何れに存在したであらうか。我が國民の更に注目すべき緊要なる重

點である。

而して、その上に我が國は、上に萬世一系の皇室を戴き、古今に比類なき國體を保持する、皇國なる點に於て、更に一層その特殊性の顯著なるものあることは、億兆周知の事實であり、こゝにまた古今に比類なき國家則家族としての、和協團結を一致結成すべき性格を、具有するのである。

九

既に古今に比類なき位置を占め、また古今に比類なき性格を具有し、今や更にこれを増強せんとする我が皇國であるから、これを以て蕞爾たる支那戰國時代の諸國に比するが如きは、もとより類を失することではあるが、而も、その歴史的必然性を得知する上に於て、必ずしも無用のことではあるまいと考へる。

支那戰國時代に於て、その大統一的大勢に順應して、常にその中核たりし秦に比すべきものが、我が皇國なるべきことは、異論の餘地なきものと考へるが、秦が多くの場合に、韓・魏・趙及び楚なる秦齊兩國の中間諸國を蠶食するに當り、その同盟國としてこれに協力せる齊は、當に獨國に比すべきであらうが、たゞ、齊が東にあり、秦が西にありしに對して、今はその反対に、皇國が東にあり、獨國が西に位置すると、また秦が全く海を有せず、却つて齊が海に面せし事情とに相違あるを見るのであ

る。更に當時の楚と三晉とはその領土の大にして、兩者長く相對立せる雄國であつた點に於て、蘇と米英とに比せらるべき、たゞ楚に比すべき蘇が北にあり、三晉に比すべき米英が南にある點に於て、その位置を顛倒するものあるを見るのであり、米英は軽て分れて米・濠及び南阿に三分せんとし、南阿は韓に、濠は魏に、米は趙に比せられるべき情勢を示してゐる。たゞ、燕に比すべき一國を見ない、だけである。

一〇

もとより、歴史は一回限りのものであるから、戰國諸國をそのままに今日見るを得ることは、當然で、特に問題とするの要を認めない。かつまた、予はこれ以上この比喩について、詳論すべき必要をも認めない。たゞ、明敏なる讀者の推測に委せたい。けれども、今日の世界はこれを戰國當時の支那に比し、その絶對面積に於て、著しく廣大であることは、もとより多言を要しないが、人類生活の方面よりしてこれを見れば、交通通信機關の顯著なる進歩發達の結果として、その面積は著しく短縮せられ、今日の世界は戰國當時の支那に比し、遙かに狹隘なるが如き、感なきを得ないのである。試みに、戰國當時に於ける支那の境域を見るに、今日鐵道の里程によると、北京・漢口間七五三哩七、天津・浦口間六二八哩四であり、また杭州・南京間約二六〇哩であるから、天津・杭州間は略々八九

○哩に上るべく、戰國時代に於ける支那境域の南北、大凡一〇〇〇哩に上つたことと推せられる。つぎに、徐州より開封・洛陽を経て、長安に至る里程が四九三哩四で、西安・蘭州間が十六日程、約四〇〇哩、青島・濟南間が二四五哩といふのであるから、戰國當時支那境域の東西の里程も、大凡一〇〇〇哩と見て、大差なきものと推せられる。

然るに、支那馬車による一日の行程は二十五哩、我が約十里であるから、その東西或は南北の旅程は約四十日を要する譯で、洛陽・長安の間ですらも、八日乃至九日を費やすなければならないのである。これを以て我が東京より昭南まで、二日程にて飛行する今日の實情に比すれば、眞に雲泥の相違にて、四十日の間には世界を一周するもなほ餘りあるものあるべきこと、疑ふべからざるところである。

—

されば、今日の世界が當時の支那に比して、寧ろ頗る狹隘なる實情にあることは、事理明白なるところである。然らば、當時の支那列國が遂に秦・漢による大統一の完成を見た事實を思ふ時、誰か將來に於ける世界の大統一完成を否定し得るであらうか。今や大統一完成への進路は、疑ひもなく世界の大勢をなしてゐる。分立より統一への傾向は、正に歴史的必然である。

而して、秦が常に當時列強の中核として、遂にその大統一を完成せし所以のものは、天の時に順ひ、地の利を得た上に、人の力を最も有功に利用せんがため、法を以てこれを束縛強制したことである。而も、主としてその法に依存し、力に依據せしことは、またその短命にして滅亡せし、重要な原因ともなつてゐる。然るに、我が皇國は今や天の時に順ひ、地の利を有するのみならず、また最も緊要なる人の和を得てゐるのである。これ蓋し、古今萬邦に比類なき、國體に基く必然の結果であり、断じて他の模倣追隨を許さざるところである。我が皇國民なるものは、斷じてこの顯著にして重要な事實に、その眼を蔽ふべきではない。眞に活眼を開いて、前途の光明を常に凝視すべきである。

一一

我が「史學」同人戰爭特輯號を發刊せんとするに當り、予もまた一文を委嘱されたのであるが、忽卒の間、特に研究論文の稿を起すの暇なく、時局に對する予の平常の所懐の一端を披瀝して、序に代へ、以てその責を塞ぐものである。

而も、かくの如き世界の大勢は、かくの如き國家に指導せられることによりて、更に前古無比なる新文化の華を開き、新生活の實を結ぶに至るべく、我が皇國の存在は、最後に來るべき眞の意味に於ける、文字通りの世界的大統一完成のためにのみ、その意義を有するもので、かくの如き目標に向つ

ての「戰ひ」こそは、即ちまた「文化の母」としての意義をも有するものと認められるのである。蕪
辭を列ねて、我が同胞の覺悟を促す所以である。